

〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 54 51～61 (2016)〕

インドネシアにおけるバティック布の現状とアイデンティティ

塩 谷 も も

(総合文化学科)

Study on *Batik* Clothing and Identity in Contemporary Indonesia

Momo SHIOYA

キーワード：バティック *Batik*、インドネシア Indonesia、
服飾 Clothing、アイデンティティ Identity

1. はじめに

本稿では、インドネシアにおいて、近年とくに注目を集めているバティックの現状を、アイデンティティとの関わりに注目しながら、現地調査に基づいて論じる。経済成長を続けるインドネシアでは、消費行動の変化が顕著であり、それは服飾、教育など多方面に及んでいる(倉沢2013)。近年では、ショッピングモールが各地に作られ、それに伴って欧米や日本から発信されるファストファッションの拡大も顕著である。

その一方で、特に2000年代以降、インドネシアからグローバルに発信されているファッションが2つある。それらは、イスラーム教徒を対象にした、ムスリムファッションとバティックである。ムスリムファッションは、女性用のものを中心であるが、ベールと肌を露出しない服の組み合わせから成る、イスラームの教義に基づいた服装を指す。東南アジアをはじめ、中東にも輸出され、世界のムスリムを対象にグローバルに展開されている。

バティックは、もとはジャワ島を中心として、ろうけつ染めの製法で作られてきた布であるが、プリ

ント生地のものもあり、生地の模様によって判断される。多民族国家であるインドネシアが国是とする「多様性の中の統一」を体現するものとして、バティックはインドネシアの国民衣装としても使われ、ナショナル・アイデンティティの象徴として重要なものであった。バティックは、学校や公務員の制服としても使われてきた(Sekimoto 1997、戸津1989)。

2009年にユネスコの世界無形文化遺産に登録されたことで、バティックは再評価された。毎週金曜日はバティックの日とされ、職場や学校などで広く着用されている。バティックは東南アジアや日本でも販売され、遠くアフリカのファッションにも影響を与えるなど、歴史的にもグローバルに展開されてきた布である(遠藤2013、吉本2006)。

インドネシアから発信されているムスリムファッションとバティックは、グローバルでありながら、宗教性や地域性を全面に出すという点で、ファストファッションとは異なっている。

現地調査は、ジャワ島のジャカルタ特別市、バティック生産地として知られる中部ジャワ州スラカルタ市、ジョグジャカルタ特別州において、2015年8月21

日から9月13日の間に実施した。バティック工房、バティック博物館、流通センター、販売店での参与観察と聞き取り、消費者を対象とする調査を行なった。なお、聞き取り調査に基づく記述については、インフォーマントの名前を仮名とする。

2. バティックとは

1) バティックの歴史

バティックとは、インドネシアではジャワ島を中心に作られてきた布で、白い布にろうけつ染めの製法で作られる。一般的には綿で作られるが、20世紀には絹で作られたものが登場し、現在はレーヨンなど化学繊維の布で作られているものもある。色、文様ともに多様で、地方ごとの特徴もある。地方間での大きな違いとして、しばしば言及されるのは、中部ジャワに現存する王宮の街であるスラカルタ、ジョグジャカルタを中心とした内陸部と、プカロガン、チレボンなどを中心とする貿易の拠点であった沿岸部の違いである。内陸のバティックが、茶色や黒など落ち着いた色であるのに対し、沿岸部のバティックは、色鮮やかで文様も中国など海外からの特徴が色濃く見られる（戸津1989：60-63、フロレンティナ2011：244）。



【写真1：多様なバティック】

バティックの製作に影響を与えたとされる、インドの更紗は、東南アジアにインドの影響が広まる時代（インドネシア領域は、紀元前1世紀から紀元後1世紀）に伝わったと考えられている。バティックは古代から作られてきたが、特にオランダがジャワ

に入った17世紀頃からバティックは作られるようになった、と現在のジャワ人は意識している（上利2009：4-5）。植民地時代には、バティックに使われる綿布は、当時の宗主国オランダ、日本などから入っていた。ヨーロッパや日本では、イミテーション・バティックと呼ばれるバティックに似せた安価なバティックが作られ、インドネシアにも輸入されていた（戸津1989：64-65、関本2003：466）。バティックは文様を変えながら、ヨーロッパからアフリカへも輸出され、その地の服飾文化にも影響を与えた（吉本2006）。

現在は、中国から材料となる布や、バティック柄に作られた生地が、インドネシアに輸入されている。一方、インドネシアからは、日本、アメリカ、ヨーロッパ、東南アジア、中東と海外へも輸出されており、インドネシアのバティック工房には、海外に店舗を構えているものもある。このようにバティックは、歴史的にそしてまた現在も、グローバルに展開されてきた布である。

バティックは、ジャワにおいては文化的な象徴としても使われてきた。例えば、マタラム王家の末裔が住む王宮都市であるスラカルタ、そしてジョグジャカルタでは、王と王族、貴族しか着用できない禁制文様が存在した。また、王宮の中であっても、身分や立場に応じて身に付けることが出来るもの、できないものがあつた。このようにかつては、バティックは身に着ける人の地位を示すものでもあつた。それぞれの文様には名前がついており、哲学、宗教的な意味があつた。バティックの製法が多様化し、安価に作られるようになった19世紀になって、バティックは人々の間に普及した（関本2003：467-468）。

さらに、1945年のインドネシア独立後は、ジャワのみならず、インドネシアを象徴する国民統合のシンボルとして使われる布となった（戸津1989：76-78、フロレンティナ263-265）。

2) バティックの種類と製法

バティックという語の語源については、諸説ある。フロレンティナは、インドネシアで広く知られた意味では、バティックは、点を意味するティックと多

いという意味のバが組み合わされたものとしている（フロレンティナ2011：244）。一方、筆者がスラカルタのダナルハディ・バティック博物館で、ガイドから受けた説明では、バティックは、「少しずつ作る」という意味のジャワ語がつまってできた語、とのことだった。

バティックは製法に基づいて、バティック・トゥリス、バティック・チャップ、バティック・プリンティングの3種類に大別される。トゥリスとチャップは、ろうけつ染めの製法を使ったものであるのに対し、プリンティングはプリント生地で蠟を用いずに型紙を使って染める。そのため、人によってはバティックの条件は、作るときに蠟を使うことなので、プリンティングはバティックと呼べないと語る人もいる。また、コンビナシと呼ばれる、2つ以上の技法を併用したバティックもある。

トゥリスは、「書く」を意味する言葉であり、チャンティンと呼ばれる道具を使って溶かした蠟で布に文様を描く。蠟のついた部分が色の染まらない部分となるので、染める部分を除いて、すべて蠟引きし、裏面も同じようにする。色を染めたら、熱湯に入れて蠟をすべて落とし、次の色を染めるために、再び染めない部分を表裏ともに蠟引きする。これを数回繰り返すことで、一枚の布が染めあがる。

手書きのトゥリスの製法でバティックを作るのは、一般的に女性である。3種のバティックの中で最も手がかり、時間もかかるため、最も高価である。



【写真2：チャンティンを使った蠟引き】

チャップは、「スタンプ」を意味する言葉であり、銅製のスタンプ型を使ったもので、溶かした蠟をスタンプに取り、それを布にあてて蠟をつける。一般的には、トゥリスと同様に、表裏同じように蠟を置く。線や点を一つ一つ手書きするトゥリスと比べると、文様がスタンプになっているので、早く蠟引きをすることが出来る。数種類のスタンプを組み合わせ、一枚の布を蠟引きする。このバティックの製作は19世紀後半から一般化した（上利2009：13、関本2003：463）。

チャップを使った蠟づけは、一般的に男性が行う仕事である。その理由について、工房で尋ねてみると、それは銅製の型が重いということだった。また、手書きのトゥリスについても、男性が行ってはいけないというルールはなく、数は少ないものの「芸術家の魂」を持っている男性は、トゥリスの技法でバティックを作ることができるそうだ。



【写真3：チャップ製法に使う銅製スタンプ】

プリンティングは、複数の型を使って、順番に色を布に直接染め付ける。トゥリスやチャップは、幅1メートル、長さ約2.5メートルの布を使って製作するが、プリンティングは、用途によって長さが異なり、長いものは10メートルほどの布を一度に染めることができる。トゥリスやチャップと異なり、片面のみを染めるので、布の表裏がはっきりと分かる。簡単に早く作れる分、値段は安価である。

プリンティングは、チャップと同様に男性が中心である。トゥリスやチャップについては、職人が工房ではなく家に持ち帰って仕事をすることもあるが、

プリンティングは広い場所を必要とするため、工房や工場で作られる。また、手作業でなく、工場で機械印刷の製法で作られたものについては、プリンティング、あるいはテキスタイルと呼ばれる。



【写真4：プリンティングの作業台】

バティックは、もとは裁断をせずに一枚布を下半身に巻きつけて、上部を帯で押さえて着るものだった。男性も女性も同じように、ジャワの正装をする際に着用する。バティックの基本の大きさである幅1メートル、長さ約2.5メートルは、この着用に適したサイズであり、男女とも同じサイズのものが使われる。結婚式をはじめとして、公式の場で着用する際は夫婦が一对で着ることが多い。そのため、正装としても使われる手書きのトゥリスは、2枚をセットにして同じデザインのもので作られることも、珍しくない。バティックは、男性が正装をした際にかぶるブランコンと呼ばれる帽子や、女性が正装をした際に肩から垂らすスレンジンというショール、乳児を抱く際に使う布などにも使われてきた。

インドネシア独立後は、制服としても使われるようになり、裁断してシャツやブラウス、スカートなどに仕立てたものが広く着られるようになった。また、それぞれのコンセプトを持ち、バティックを使ったファッションを提案するデザイナーたちも登場している（松本2015）。

3. アイデンティティを象徴するバティック

1) 制服としてのバティックの歴史

多民族国家であり、20世紀半ばになって独立した

インドネシアでは、いかに国民統合を図るかが重要な課題であり続けた。こうした中で、前述の通り、統合の象徴の一つとして用いられたのがバティックである。「多様性の中の統一」を国是とするインドネシアでは、民族ごと、地方ごとの特徴を消すことなく、一つにまとまることを目指してきた。この多様性を象徴するものの代表は各地の服飾文化であり、各地の「民族衣装」をまとった人々の絵や写真がインドネシア各地の文化紹介の本や地図などで、しばしば使われてきた。多様な人々をインドネシアという名でまとめる服飾としては、バティックが採用された。

インドネシアにおいて、国民衣装と呼ばれるものは、男性用はバティックの長袖ワイシャツと長ズボンのセット、女性用はカイン・クバヤと呼ばれるバティックの巻きスカートと、クバヤと呼ばれるブラウスのセットである。国家行事をはじめとして、公式の場ではこれがインドネシアのアイデンティティを示すものとして、着用されるようになった（上利2009：16-17、戸津1989：78）。

スカルノ初代大統領は、デザイナーかつ舞踊家でもあった中国系ジャワ人のハルジョナゴロ氏に、国を代表する新しいバティックの創作を1957年に依頼した。ハルジョナゴロ氏は、各地のバティックを調査し、それぞれの文様と色を融合させながら、バティック・インドネシアと呼ばれる新たなバティックを製作した。このバティック・インドネシアの成功によって、それを模倣した、ファッショナブルなバティックが作られるようになった（戸津1989：77-78、フロレンティナ2011：259-261、松本2015：55-59）。このように、バティックをインドネシア全体の象徴とするため、これまでの伝統にとらわれないバティックを新たに製作することが行われた。同時に、そのことはバティックのファッション化と、人々への拡大・浸透へとつながった。

スカルノ初代大統領は、全国の学校の制服として、バティックのシャツの採用を指導し、公務員も同様にバティックのシャツを着るようになった（戸津1989：78）。スハルト第二代大統領は、この服装を通じて人々を統合する方法を受け継ぎ、さまざまな

場に制服を導入した。また、学校や職場などで、曜日や特定の日に異なる制服を着ることが定められるなど、同じ集団の中でも複数の制服が用いられることがあった。公務員が着る全国共通の制服、学生が着る制服にも、引き続きバティックは使われた(Sekimoto1997、フロレンティナ2011:263)。

例えば、スラカルタ市にある国立大学のもと職員に聞き取り調査をしたところ、大学職員は、スハルト政権時代には、月曜日・火曜日は灰色の制服（教育分野に従事する公務員専用）を着ることが定められていた。また、バティック柄の公務員組織であるコプリの制服は、毎年8月17日の独立記念日、独立記念日に基づいて毎月17日、公務員組織の日である毎月29日、5月2日の教育の日などに着るルールがあった。



【写真5：公務員用のバティックシャツ制服】

スハルト元大統領が退任した1998年以降、大学内での制服規定は廃止されたとのことである。しか

し、その後も大学によっては、独自に制服を定めたところがある。スラカルタ市の国立大学の例では、職員については、月曜日はオフホワイトの上着、火曜日は濃い青の上着を着て、金曜日はバティックの日と定められている。学生についても、教育学部は月曜日・火曜日は白のシャツを着るというルールがあるそうだ。また、学生は教育実習、職場でのインターンシップに参加する際は、バティック柄の制服を着る。

国の制服規定が廃止されたのちも、大学内で独自に制服のルールを作る理由について尋ねてみると、制服はスハルト元大統領の任期にあたる30年以上の習慣であり、人々に浸透しているものだから、なくすのは難しいと説明された。スハルト政権時代には、職場や学校以外にも、全国の公務員女性と公務員の妻が参加する女性団体、軍人の妻の女性団体、町内会の婦人会等々、制服はさまざまな場で着られてきた。それに付け加えて、さまざまな場面で同じにすることが求められた。例えば、家の柵の色についても、与党のシンボルカラーである黄色にすることが求められたという。このように、同じ色あるいは同じ柄のものを身に着けることで、一体感を出すことはさまざまな場で行われており、バティックはそんななかでも特別な意味を持たされてきた。

スハルト政権の崩壊後、バティックは、2009年にユネスコの世界無形文化遺産に登録されたことで、再び脚光を浴びた。また、世界無形文化遺産登録の数年前には、隣国のマレーシアがバティックを自らの国のものだと主張したことで、インドネシアとの間で論争が起こった。地理的に近く、文化的に類似点があるマレーシアとインドネシアでは、バティックに限らず、伝統芸能などをめぐって、どちらの国のものであるかが、しばしば問題となってきた。

マレーシアとの論争とユネスコの世界無形文化遺産でインドネシアのものとして登録されたことにより、バティックは再び人々の注目を集めるようになった。また、無形文化遺産に登録された日である10月2日は、毎年記念日として全国的にバティックが着用され、毎週金曜日はバティックの日として職場や学校での着用がなされている。このように、初代大

統領によってインドネシアの象徴とされたバティックは、制服として広く使われ、近年になって再びインドネシアのアイデンティティの象徴として、注目されるようになった。バティックが文化遺産に登録された翌年の2010年には、当時のアニ・バンバン・ユドヨノ大統領夫人が、バティックに関する本を出版した（Ani 2010）。前大統領夫人がバティック・トゥリスを作る姿が表紙の写真として使われるなど、バティックがインドネシアの文化的象徴であることが、強調されたものになっている。

2) 制服としてのバティックの現在

バティック生産の中心地のひとつであるスラカルタ市は、ジョコ・ウィドド現インドネシア大統領が、2005年から2012年にかけて市長を務めた街でもある。ジョコ氏は、2012年に地元の産業と伝統の継承のためとして、民族衣装の制服を毎週木曜日に公務員対象に導入し、それを小学校（4年生以上）から高校まで拡大した。

ここで指定された民族衣装は、下に茶色のバティックの布を巻き、上はクリーム色で統一され、女性はクバヤと呼ばれるブラウス、男性はブスカップと呼ばれるスーツを身に着けるスタイルである。下に着用するバティックは、本来は一枚布を巻きつけて着るのが正式の着方であるが、着用の便利さと職場や学校での活動を考慮して、機能的に作られている。男性用は長ズボン型に縫ってあるが、足を閉じていると巻きスカートに見えるデザインになっている。女性用は長いスカートを着用し、こちらも一見すると伝統衣装のように一枚の布を巻きつけて着ているように見えるデザインになっている。色と形は決まっているが、バティックの文様は統一されていないため、各々自分の好きなものを着用する。

値段は、中学生の男性用民族衣装の例では、一セットが250,000ルピア（約2,500円）とのことである。現地の物価からは、安い値段ではないため、民族衣装を導入していない学校も存在している。

また、教員については、毎週木曜日は、学生たちと同じ民族衣装を着用している。毎週水曜日にバティック・クリシュナという、影絵芝居ワヤン・クリッデ

演じられるマハーバーラタの登場人物であるクリシュナが描かれたバティックを着用する。金曜日と土曜日は、柄は自由だがバティックを着ることが決められているようだ。学生については、金曜日は学校ごとに異なるバティックが、採用されている。



【写真6：民族衣装の制服を着用した教員】

ソロ市に隣接するカラングニャール県では、リニ・イリアニ前知事の時代（任期2003年～2013年）、第3木曜日が民族衣装の日に指定された。学校で略式のバティックスカートやズボンではなく、一枚布のバティックを巻きつけて着る民族衣装を導入した。

また、コンテストでカラングニャール県のバティックが作られ、制服としても採用された。KNAとカラングニャールの略称が入っており、稲を叩く農民の姿、クダルンピンという馬の作り物を使って踊る芸能が描いてある。一見すると、色もデザインもいわゆる伝統的なバティックらしくないものになっている。これを着用していたという同県の学校職員は、なぜこれが県のバティックとして選ばれたか不思議だとコメントした。

前知事の退任後、2014年には、新しいカラングニャール県のバティックが作られた。新しいものは、前回の色鮮やかなものとは対照的に、非常に落ち着いた、茶色で染めただけのいわゆる伝統的なものが採用された。カラングニャール県にある古いヒンドゥー寺院や山が文様として大きく描かれている。見せてもらった生地には、男性性用と女性用、そして長そでと短いそでのものでは、どのように文様が配置されるのが正しいか、仕立て方のルールが書かれた紙

がついていた。

このように、近年は自治体ごとにバティックを制服として、その地方のアイデンティティを示すものとして採用する動きがある。

さらにバティックは、職場での制服としても広く使われるようになってきている。例えば大手タクシー会社は、企業マークを織り込んだデザインのパティックシャツを制服として採用しており、航空会社もバティックに企業マークを織り込んだものを、制服として使っている。大学の事務局、銀行等、その他にもバティックの制服を着用しているところは、多数見られた。

このように、バティックは、国や地方のみならず、職場をはじめとしてさまざまな集団で一体感を演出するために、さまざまな場で使われている。また、いずれもここ数年で新しく作られたと説明された。このように、特に2009年のユネスコ世界無形文化遺産登録以降、バティックはさまざまな集団の一体感を演出するために、再び使われるようになっていくことが明らかである。

4. バティックのファッション化

1) 新たなバティックの製作と地方性

バティックについて聞き取り調査を行なうと、現在のバティックはデザイン性が磨かれてモダンになり、人々が着用する機会は拡大したと説明されることが多い。

バティックの販売店で最近のバティックの変化について尋ねると、共通して、模様の変化よりも、色の変化が大きいという回答が返ってきた。例えば、これまでのバティックでは、白ぬきになっていた部分に鮮やかな色を入れる、あるいは模様が一色で作られていたものに複数の色を加える、これまではなかった淡い色のバティックを作るなどの方法がとられている。

最近では、他のファッションと同様に、バティックの色にも流行があり、例えば今年は紫が流行など、首都ジャカルタを中心としてファッションとしての流行が作られるのだという。こうしたファッション性が重視される傾向は、2009年のユネスコ世界無

形文化遺産登録が、一つの契機となっているとのことだった。それ以降、金曜日の職場での着用をはじめとして、バティックを着る機会は増えた。そのため、ファッション性に優れたバティックが必要とされるようになった。

その一方で、1990年代には、バティックには古い、時代遅れなものというイメージが結びついてきたとのことである。1990年代には結婚式をはじめとしたフォーマルな招待の際に着用する以外は、バティックはほとんど着られることもなくなっていたそうである。現在のように、職場で着るということも一般的ではなかった。

現在は、制服として、あるいは職場での着用に限らず、プライベートな場でもおしゃれとして、日常的にバティックが着られている。バティックに対する意識が変わったこと、そしてファッション性が磨かれるなどモダンなものになったことが、組み合わせられて着られるようになった。

また、調査の結果、色をアレンジする以外に、近年では新たな文様のバティックを作る動きが出ていることも明らかになった。それは、地方ごとの特徴を生かした形で行われている。地方分権化の進行も背景にあり、地方ごとのバティックが作られる現象は、今も進行中である。前述のスラカルタ市で毎週水曜日に着られるバティック・クリシュナも、ランガニャール県のバティックも、新たに作られたものである。

ジャカルタで訪問したあるジャワ人夫婦の家では、バティックについて話をしていると、家にある各種バティックを取り出して見せてくれた。この夫婦と会った金曜日は、バティックを会社に来ていく日ということで、夫の方は見たことのない柄の変ったバティックを着ていた。このバティックについて質問してみると、西パプア州の文様を取り入れた新しいバティックで、そこを訪れた親戚からお土産としてもらったのだと語った。西パプア州にはもともとバティックを作る習慣はなかったが、近年になって新しく作られたものだそうだ。

また、後日ジャカルタでバティックを扱う流通センターを調査した際も、西パプア州やスラウェシな

ど各地の布をバティック風に作ったものが見られた。スラウェシは織物が中心の地域であるが、織物の文様が、染物のバティックに取り入れられて、新たなバティックが作られているのである。しかし、こうした布はその地で作られるのではなく、バティック生産の中心地である中部ジャワなどで作られているとのことである。



【写真7：マランのリンゴ柄バティック】

この夫婦が見せてくれたバティックのコレクションは、いずれもシャツとブラウスの形に縫ったバティックであった。そのなかで、これが最近の傾向だと説明してくれたのは、東ジャワ州のマラン市のバティックだった。男性用・女性用と夫婦で一對に仕立てられたシャツで、リンゴの模様がバティックの中に描かれていた。マラン市は、リンゴの産地として有名なもので、こうしたバティックが新たに作られているのだと語った。

また、ジャカルタで訪問した研究所のジャワ人男性は、西スラウェシ州の文様だというシャツを着ていた。スラウェシを訪れた際に、買ったものだそう。その男性によれば、自分の出身地であるからとバティックを選ぶことは珍しく、あくまでもデザイン性が優先した選択が行われる。そのため、一人の人が、様々な地域のバティックを着る。例えば、自分はジャワの出身だが、出身地近くの沿岸部のバティックは、文様が好きではないので着ないと話した。

このように、出身地ではなく、ファッション性が重視されてバティックが選ばれる傾向については、他の聞き取りでも共通したことだった。例えば、バ

ティック博物館ガイドの男性は、スラカルタのような内陸部の人は、もとのデザインが茶色を中心とした地味なバティックなので、逆に沿岸部の色鮮やかなバティックを着たがる傾向がある。逆に、沿岸部の人は、内陸部のバティックを着たがるという面白い傾向があると語った。また、スラカルタ市に住む女性は、特に若者は色でバティックを選ぶので、内陸部の人であっても、鮮やかな沿岸部のデザインのものを好むと語った。

また、スラカルタ市で参与観察したある家の新築記念パーティーでは、その家の男性は、デザインの変った赤いバティックのシャツを着ており、人目を引いた。柄に注目してみると、独立記念塔モナス、ブタウィの人びとの魔除け人形であるオンデル・オンデルなど、首都ジャカルタを象徴するものが描かれていることが分かった。なぜ、それを着ていたのか、またどこで入手したものなのかについて、聞く機会がなかったので不明である。しかし、このパーティーには、スラカルタ市周辺の特徴である茶色のバティックシャツを着てくる招待客が多い中で、赤く珍しい文様のバティックは、非常に目立っていた。

2) 新たなバティックの製作

ここでは作り手に注目して、地方の特徴を出した新たなバティックの製作を2件、マレーシアへの輸出にともなうバティックの製作を1件、事例に基づいて記述する。

(1) バティック・ボゴール

ジャカルタ近郊のボゴール市においては、ボゴールの特徴を生かしたバティック・ボゴールが新たに作られている。クブン・ラヤ植物園近くにあるショッピングモールの中には、このバティックを売る店舗が入っており、ここでの調査を実施した。店員の女性によれば、オーナーは、バティック生産の中心地である中部ジャワ州の出身者とのことである。店内には、子供服から成人男女用のシャツを中心とした既製服、一枚布、ペンケースやポーチなどの雑貨が並べられていた。

ここで入手した紹介リーフレットによれば、このバティックは2008年1月13日に新しく作られたも

の、と日付入りで紹介がなされている。創業者が、愛するボゴールのために何か役に立ちたいと考えて、バティックを作ったといういきさつが書かれている。さらに、これを通じて、ボゴールの住民に働く場の提供、ユネスコが2009年にインドネシアの文化として登録した文化伝統を維持するためとある。このバティックを教える教室を開いていることも書かれている。商品の紹介写真は、洋服に仕立てたもの、履物、人形、壺、ヘルメットと多様である。

文様は、インドネシア大統領宮殿であるボゴール宮殿、クブン・ラヤ植物園にいる鹿、植物園のラフレシア、タラスという植物、雨が多い街なので雨と雲、この地方の短剣など、ボゴールを象徴するもので構成されている。鹿の文様が書かれた天然染料を使った手書きのバティックは、1枚が470万ルピア（約4万7千円）と高価であった。首都に近いこの地方で製作すると、職人の賃金が中部ジャワに比べて高いので、値段は高めになるとのことだった。

(2) バティック・スレマン

ジョグジャカルタ特別州のスレマン県に位置する村では、天然染料、手書きバティックを製作する、もと芸術大学教員ババ・ワワンは工房を訪問した。もとは彫刻が専門だったそうだが、定年退職を前にバティックのデザインを学ぶようになり、藍をはじめとする天然染料にこだわった工房を開いたそうだ。工房には商品を並べたスペースもあり、布、マネキンが身に着けたワンピース、シャツなどが数点並べられていた。

ババ・ワワンは、この地方の若者に就業の機会をと考えたが、天然染料のものは難しく手間がかかるため、あまり関心を持たれないのが残念だと話した。実際に雨季と乾季では布の染まり方が異なるなど難しい面があり、染める過程での作業にも手間がかかるそうだ。

天然染料にこだわるのは、地球環境を考えてとのこと、手間はかかるが未来の子孫のために化学染料を使うのは避けているとのことである。工房の紹介リーフレットには、この工房の布が使われた2014年ジョグジャカルタのファッションショーでの写真、バティックを作る過程を紹介した写真、店舗のバティッ

クなどが掲載されている。

訪問した際は、ババ・ワワンは、新しいバティックのデザインをしているところで、白い布に鉛筆で絵を描いていた。これまでに、この地方の特産である果物サラッ、ノニの実、プチタという植物、スナック菓子のペーエツ、近くにあるヒンドゥー時代の寺院の遺跡など、この地方を象徴するものを盛り込んだバティックをデザインしたとのことだった。今では、インドネシア各地の県、市が地域の特徴を出した模様のバティックを作るようになった。地方の特徴を生かしたバティックを製作するようになったのは、バティックの世界無形文化遺産登録の一年前、2008年からとのことである。

商品は手書きかつ天然染料を使ったものであるもので値段が高く、バティック・ボゴールと同様に1枚が4万円ほどするものが多かった。また、シャツやワンピース等に仕立てたものも売っている。バティックの販売は、ジョグジャカルタ近郊の高級ホテル数軒、バリのホテルへの委託販売、そして展示会での販売が中心とのことである。

このような地方性を生かしたバティックは、各地で作られている。制服として採用されるプリント生地のもの以外は、必ずしも地元の人に着られているのではない。ここで紹介した2つの工房は、地方のデザインを生かしたものを作っているが、販売場所と価格から、地元の人ではなく海外からの旅行客を含め、外部の人を買われていることがうかがえる。

(3) バティック・マレーシア

ここでは、新たなバティックの製作と展開例として、海外進出をした工房の事例を記す。バティックの工房が集まるスラカルタ市のラウエアン地区では、バティック工房を営んで6代目のババ・ジョコに聞き取り調査を実施した。1978年代に工房を継いでは、伝統的なバティックを作り商ってきたが、1990年代になり伝統的なバティックは売れなくなった。親から子へと引き継がれ、数多くのバティック工房があったラウエアン地区では、2000年代ははじめまでにバティック工房は6軒ほどにまで減少したとのことである。

1990年代の伝統的なバティックが売れなくなっ

た時期に、パパ・ジョコは海外に活路を見いだした。1990年からはマレーシア向けのバティック生地を作って輸出するようになった。1995年には日本から注文を受けて着物（と説明されたが、ゆかただと思われる）の生地を12種類デザインし、生地を製作したとのことである。日本向けは品質管理が非常に厳しく、大変だったそうだ。そのため、マレーシア向けの輸出は現在も続いているが、日本向けの輸出は行っていないそうである。

マレーシアには、はじめは材料となるレーヨン生地の売り込みに行き、そこからバティックのビジネスへとつなげていった。マレーシアのバティックは、インドネシアのバティックと異なり、刷毛や筆を使って直接生地に色をつける。イスラームの影響でインドネシアとは異なり、生き物を一切描かない。そのため、インドネシアのバティックでは一般的な鳥や蝶の文様のものはないそうだ。また、インドネシアではバティックのシャツを作る際、全体に模様があるのが一般的だが、マレーシアのバティックは、全体を模様で埋め尽くさない特徴がある。



【写真8：マレーシア式のバティックシャツ】

マレーシア向けのバティックについては、最初はマレーシアの職人を半年ほど招き、技術を修得した。デザインもその間に作られたが、今はパパ・ジョコも自分でデザインをするそうだ。マレーシア向けのものは、男性用は襟付きのシャツ、女性用は長いワンピースのカフタンがよく売れるとのことである。シャツはインドネシアでも受け入れられており、ジーンズとあわせてカジュアルに着られるので好評だそ

うだ。パパ・ジョコによれば、クリエイティブであることが何よりも大切であり、何が売れているか市場にあわせることも大事であると語った。

マレーシアと日本以外に、タイ、カンボジアにもバティックを売り込んだことがあるが、その後の注文は入っていない。また、最近ではマレーシアだけでなく、西カリマンタン州の布の文様を取り入れたバティックもデザインし、製作しているそうだ。近所の工房では、バリ島、アメリカ、ヨーロッパ向けの製品を作っているところもあるとのことだった。

5. おわりに

調査の結果、まず明らかになったことは、国のアイデンティティを支えるものとしてのバティックの意味が変化し、各地方のアイデンティティを象徴するものとしてのバティックの製作が進んでいることである。かつてのバティックは、模様や色の特徴から地域性が明らかになるものであったが、今はその地域にある建物、動植物、特産品などが模様に入っており、見てわかりやすいバティックが作られている。また、スラウェシのバティック事例にみられるように、織物で作られていた布の文様を使って染物のバティックで作る、その地域に伝わる模様をバティックで表現するなど、新たなバティックが生み出されている。

こうして作られたバティックは、カラングニャール県の事例のように、その地方の制服としても使われている。地方自治が進められた結果として、現在のインドネシアでは、地方ごとのバティックが重要性を持つようになった。公募でそのデザインが選ばれるなど、もともとあったバティックを活用するのではなく、その地域の独自性を前面に出したバティックが作られている。

また、地方の特徴を出したバティックは、その地を訪れた人が買うおみやげ品にもなっており、バティックが雇用の機会と収入の拡大につながっている。インドネシアでは、地名や風景を入れたTシャツが、観光地などで販売されている。日常生活の中で人々が着ているのを目にすることは珍しくなく、海外の国名や地名が入っているものもよく目にする。Tシャ

ッは旅行の記念品として買われ、おみやげとして人に贈られることも多い。地方版のバティックは、文様の特徴からどこのものであるかが分かることから、この延長線上にあるとも考えられる。

地方性を出した文様のバティックに加え、色をアレンジし、ファッション性を高めたものも、広がっている。文様の意味や出身地のものであるかは意識されず、あくまでファッションとして選ばれ、消費されている。マレーシアへの輸出事例にみられるように、その国の好みに合わせたものが作られ、さらにそれがインドネシア国内でも販売され、新しいバティックとして着られているものもある。

このようにバティックは、文様、色、それぞれに新たなものが生み出され続けており、着用される機会も増加していることが明らかになった。この動きは、かつてスカルノ初代大統領が、国民のアイデンティティを支えるものとしてインドネシア・バティックを新たに作り、それが人々の関心をバティックに集め、ファッションとして流行した時代の流れと共通する点がある。

しかし、近年のバティックをめぐる動きは、隣国マレーシアとのバティックをめぐる論争、ユネスコの世界無形文化遺産登録と、外部からのグローバルな動きに影響を受けつつ進行したところに違いがある。また、2000年代の半ば頃からインドネシアで急激に進行したムスリムファッションの流行との関連も、無視することはできない。今後の課題は、インドネシアから発信されているこの2つのファッションの展開を分析しながら、服飾とアイデンティティとの関わりをさらに考察することである。

謝辞：本研究の現地調査は、JSPS科研費15K01904の助成を受けたものです。

参考文献

- 伊藤ふさ美・小笠原小枝1999『ジャワ更紗：いかに生きる伝統』小学館
- 上利博規2009「インドネシアのバティックに見る手仕事の変遷と現代」『アジア研究』4：1-19
- 遠藤聡子2013『パーニユの文化誌：現代西アフリカ女性のファッションが語る独自性』昭和堂
- 倉沢愛子編著2013『消費するインドネシア』慶応大学出版会
- 関本照夫2003「市場とコミュニティ：ジャワ・バティックとその社会的土台」東京大学東洋文化研究所編『アジア学の将来像』457-484
- 戸津正勝1989「インドネシアにおける民族文化と国民統合：BATIKの変容過程を中心として」『国士館大学教養論集』28：51-83
- フロレンティナ、ユリカ・アユニングティアス2011『国士館大学大学院政経論集』14：243-271
- 松本由香2015『インドネシアのファッション・デザイナーたち：多文化性・伝統・グローバル化を読み解く』ナカニシヤ出版
- 三尾裕子・床呂郁哉2012『グローバリゼーションズ：人類学、歴史学、地域研究の現場から』弘文堂
- 吉本忍編2006『更紗今昔物語：ジャワから世界へ』国立民族学博物館
- Ani Bambang Yudhoyono 2010 Batikku: pengabdian cinta tak berkata. Gramedia Pustaka Utama.
- Sekimoto, Teruo 1997 "Uniforms and concrete walls: Dressing the village under the New Order in the 1970s and 1980s." In. Nordholdt, Henk Schulte. (ed.) Outward Appearances: dressing state and society in Indonesia, pp.307-338. KITLV Press.

(受稿 平成27年11月9日, 受理 平成27年12月24日)